

原 著

## 医学生の産業医志向に関する調査

井奈波良一

岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野

(平成 24 年 7 月 11 日受付)

**要旨：【目的】** 医学生の卒後の希望進路と産業医業務に対する認識を明らかにすること。

**【方法】** 一大学の 2 年次および 3 年次の医学生 146 名を対象に、2012 年に実施した自記式アンケート調査結果について分析した。対象者を、産業医を進路選択の一つとして「考えている、または考えたことがある」または「今は考えていないが、今後考えるかもしれない」と回答した者の群（以下、産業医志向あり群）と「今も、今後考えることはない」と回答した者の群（以下、産業医志向なし群）に分け、群間比較を行った。

**【結果】** 1. 卒後の希望進路として、第 1 志望に保健所医師・医系技官、産業医、保険医をあげた医学生は女子 1 名 (0.7%) にすぎなかったが、産業医志向のある学生は 46.6% に達していた。2. 産業医志向と周囲に産業医がいることおよび医学科志望の動機との関連はみられなかった。3. 産業医業務に対する否定的な回答は極めて少なかった。4. 産業医志向の有無によって、産業医業務に就く場合の条件が異なり、産業医志向のある者では会社の受け入れ体制の整備、ない者では臨床との平行業務との回答が最も多かった。

**【結論】** 医学生の産業医についての関心や卒後の進路としての可能性、産業医を進路とする際に考慮する点は、過去の報告と大筋では似ていた。

(日職災医誌, 61 : 193—198, 2013)

### —キーワード—

医学生, 産業医, 希望進路

### はじめに

将来の産業医を担うべき医学生が、産業医ならびに産業医制度に対していただいている認識、意識についての調査・検討は、著者が調べた限りでは、垂水ら<sup>1)</sup>が、産業医制度が実態として十分に機能していなかった 1993 年 10 月～1994 年 3 月<sup>2)</sup>に 6 国公立大学 (近畿 6 府県各 1 校) の 5 年次医学生を対象に行った調査があるにすぎない。

1998 年 10 月から医師が産業医の資格を得るためには、厚生労働大臣の定める研修を修了するなど一定の要件が必要になった (安衛側第 14 条)。また、産業医に求められる職務も、近年、2005 年の労働安全衛生法の改正に伴う過重労働・メンタルヘルス対策など増加傾向にある。したがって、医学生の産業医ならびに産業医制度に対する認識、意識も変化している可能性がある。

そこで、今回、3 年次、4 年次の医学生を対象に、産業医についての関心や卒後の進路としての可能性、産業医を進路とする際に考慮する点等について調査したので報告する。

### 対象と方法

A 大学医学部医学科の医学生 (3 年次 104 名および 4 年次 70 名、計 174 名) を対象に無記名自記式のアンケート調査を実施した。なお本調査に先立ち、A 大学大学院医学系研究科医学研究等倫理審査委員会の承認を得た。

調査項目は、垂水らの報告<sup>1)</sup>に準じて作成し、性、年齢の代替として大学受験歴 (現役、一浪・二浪、三浪以上・再受験)、医学生の卒後の第 1 希望進路、産業医志向、医学科を志望した動機、進路選択に際して考慮する要件、保健所医師・医系技官・産業医に対する認識およびイメージ量、産業医業務に対する認識、に加えて、周囲の産業医の有無および産業医科大学受験に関する項目を新たに追加した。産業医志向に関する問は、垂水らの結果<sup>1)</sup>と異なり、産業医を進路選択の一つとして、「考えている、または考えたことがある」、「今は考えていないが、今後考えるかもしれない」、「今も、今後考えることはない」の 3 択問題とした。

調査は 2012 年 5 月中旬～6 月上旬に実施し、3 年生 97

表1 対象者の性別・学年別にみた産業医志向

	産業医志向		3年生	4年生	全体
			男子	あり	人数 34 %
	なし	人数 35 %	22 50.7	57 59.5	53.8
	合計	人数	69	37	106
女子*	あり	人数 9 %	9 33.3	18 75.0	18 46.2
	なし	人数 18 %	3 66.7	21 25.0	21 53.8
	合計	人数	27	12	39
全体	あり	人数 44 <sup>a</sup> %	24 45.4	68 <sup>a</sup> 49.0	46.6
	なし	人数 53 %	25 54.6	78 51.0	53.4
	合計	人数	97	49	146

<sup>a</sup>: 性別不詳の1名を含む

3年生と4年生の差: \*P<0.05

名(回収率93.2%, 4年生49名(回収率70.0%)), 計146名(回収率83.9%)から回答を得た。

対象者を、産業医を進路選択の一つとして「考えている、または考えたことがある」(11名, 7.5%)または「今は考えていないが、今後考えるかもしれない」(57名, 39.0%)と回答した者の群(以下、産業医志向あり群)(68名, 46.6%)と「今も、今後考えることはない」と回答した者の群(以下、産業医志向なし群)(78名, 53.4%)に分け、群間比較を行った。

統計ソフトとしてSPSS(11.5版)を用いた。有意差検定は、t検定、 $\chi^2$ 検定またはFisherの直接確率計算法を用いて行い、P<0.05で有意差ありと判定した。

## 結 果

表1に対象者の性別・学年別にみた産業医志向を示した。産業医志向ありの割合は、性別での有意差はなかった。学年別では、女子においてのみ4年生(75.0%)が3年生(33.3%)より有意に高率であった(P<0.05)。

産業医志向ありの割合を大学受験歴でみると、現役(84名)が46.4%、一浪・二浪(33名)が39.4%、三浪以上・再受験(29名)が55.2%と有意差はなかった。

表2に対象者の性別・産業医志向別にみた卒後の第1希望進路割合を示した。卒後の第1希望進路割合には性別・産業医志向の有無による有意差はなく、全体で臨床医が94.4%で最も高率であり、以下、研究者(2.8%)、その他(保健所医師・医系技官、産業医、保険医)(0.7%、女子1名)の順であった。

表3に対象者の産業医科大学受験経験を示した。産業医志向あり群は、なし群より「受験した」または「考えたが受験しなかった」割合が高率であり、「考えなかった」割合が低かった(P<0.05)。

表2 対象者の性別・産業医志向別にみた卒後の第1希望進路割合

(単位: %)

	希望進路項目	産業医志向		合計全体	全体 <sup>a</sup>
		あり	なし		
男子		(n=48)	(n=57)	(n=105)	(n=144)
	研究者	6.3	1.8	3.8	2.8
	臨床医	93.8	94.7	94.3	94.4
	その他(医学関連 <sup>b</sup> )	0.0	0.0	0.0	0.7
	いずれでもない	0.0	0.0	0.0	0.7
	無回答	0.0	3.5	1.9	1.4
女子		(n=18)	(n=21)	(n=39)	
	研究者	0.0	0.0	0.0	
	臨床医	100.0	90.5	94.9	
	その他	0.0	4.8	2.6	
	いずれでもない	0.0	4.8	2.6	
	無回答	0.0	0.0	0.0	

表示は、各性・産業医志向の有無における人員数に対する割合

<sup>a</sup>: 男女合計 <sup>b</sup>: 保健所医師・医系技官、産業医、保険医

表3 対象者の産業医科大学受験経験

(単位: %)

回答項目	産業医志向*		全体(n=146)
	あり(n=68)	なし(n=78)	
受験した	2.9	1.3	2.1
考えたが受験しなかった	14.7	2.6	8.2
考えなかった	82.4	96.2	89.7

2群の差: \*P<0.05

表4 対象者の周囲における産業医の有無(複数回答)

(単位: %)

回答項目	産業医志向		全体(n=146)
	あり(n=68)	なし(n=78)	
周囲に産業医がいる	7.4	5.1	6.2
家族	5.9	3.8	4.8
親戚	0.0	0.0	0.0
知人	1.5	0.0	0.7
その他	0.0	2.6	1.4

表4に対象者の周囲における産業医の有無を示した。対象者の周囲に産業医がいる割合は、産業医志向の有無による有意差はなく、全体で6.2%であり、具体的には家族が4.8%で最も高率であった。

表5に対象者の医学科を志望した動機を示した。対象者の医学科志望動機に関するいずれの項目の割合にも、産業医志向の有無による有意差はなかった。対象者全体でみて最も高率であった動機は「人を救える」(52.1%)であり、以下、「安定した職業」(40.4%)、「尊敬する職業」(26.7%)、「生命等への興味」(23.3%)、「高賃金である」(19.9%)の順であった。

表6に対象者が進路選択に際して考慮する要件を示した。対象者の進路選択に際して考慮する要件に関するいずれの項目の割合にも、産業医志向の有無による有意差はなかった。対象者全体でみて最も高率であった要件は「能力・個性を活かしたい」(56.2%)であり、以下、「社会に役立ちたい」(47.3%)、「楽しい生活」(43.2%)、「自己の興味の追求」(43.2%)、「経済的な豊かさ」(40.4%)の順であった。

表7に対象者の保健所医師・医系技官、産業医に対する認識を示した。対象者の保健所医師・医系技官、産業医に対する意識に関して、産業医志向あり群はなし群より、「保健所医師等の職種に関心がある」と回答した割合が有意に高率であり、「患者に接する機会が少なくもの足りない」および「そうした職種の情報が不足している」と回答した割合が有意に低率であった(P<0.05 または P<

0.01)。対象者全体でみて最も高率であった回答は「そうした職種の情報が不足している」(81.5%)であり、以下、「企業などの大きなレベルで仕事ができる」(44.5%)、「患者に接する機会が少なくもの足りない」(41.8%)、「医師以外の人が多く心細い」(33.6%)、「臨床医に比べて給与水準が低い」(25.3%)の順であった。

表8に対象者の保健所医師・医系技官、産業医に対するイメージ量を示した。産業医に対するイメージ量が「多い」(「非常にたくさん」または「ある程度」と回答した対象者の割合は、産業医志向あり群(39.7%)が、なし群(16.7%)より有意に高率であった(P<0.01)。対象者全体でみて、イメージ量が「多い」と回答した対象者の割合は、保健所医師・医系技官が10.3%、産業医が27.4%であった。

表9の対象者の産業医業務に対する認識を示した。対象者の産業医業務に対する認識に関して、産業医志向あり群はなし群より、「会社の体制が整っているならやってみたい」、「必要な知識の修得ができるならやってみたい」、「臨床の専門分野修得後ならやってみたい」および「臨床と並行してならやってみたい」と回答した割合が有意に高率であった(いずれもP<0.01)。対象者全体でみ

表5 対象者の医学科を志望した動機 (複数回答)

(単位：%)

回答項目	産業医志向		全体 (n=146)
	あり (n=68)	なし (n=78)	
親の勧め	16.2	16.7	16.4
教師の勧め	2.9	9.0	6.2
親等が医者	5.9	12.8	9.6
偏差値から	20.6	17.9	19.2
人との触れ合い	17.6	12.8	15.1
人を救える	52.9	51.3	52.1
生命等への興味	29.4	17.9	23.3
性格に合っている	19.1	16.7	17.8
自己裁量が大	11.8	3.8	7.5
高賃金である	19.1	20.5	19.9
社会的評価が高い	20.6	15.4	17.8
尊敬する職業	27.9	25.6	26.7
厳粛な職業	2.9	0.0	1.4
安定した職業	41.2	39.7	40.4
長く続けられる	13.2	17.9	15.8
なんとなく	13.2	5.1	8.9
その他の理由	8.8	9.0	8.9

表6 対象者が進路選択に際して考慮する要件 (複数回答)

(単位：%)

回答項目	産業医志向		全体 (n=146)
	あり (n=68)	なし (n=78)	
能力・個性を活かしたい	58.8	53.8	56.2
経済的な豊かさ	39.7	41.0	40.4
社会的な地位	16.2	12.8	14.4
楽しい生活	47.1	39.7	43.2
自己の興味の追求	47.1	39.7	43.2
社会に役立ちたい	54.4	41.0	47.3
職種・ポストの将来性	11.8	10.3	11.0
人のために尽くす	33.8	26.9	30.1
その他の理由	7.4	7.7	7.5

表7 対象者の保健所医師・医系技官、産業医に対する認識 (複数回答)

(各質問に「まったくそうである」、「そうである」と回答した割合) (単位：%)

質問項目	産業医志向		全体 (n=146)
	あり (n=68)	なし (n=78)	
保健所医師等の職種に関心がある*	27.9	11.5	19.2
臨床医に比べて社会的評価が低い	17.6	28.2	23.3
研究対象となるテーマが少ない	17.6	30.8	24.7
医師としてのアイデンティティーが少ない	20.6	28.2	24.7
臨床医に比べて給与水準が低い	26.5	24.4	25.3
患者に接する機会が少なくもの足りない*	30.9	51.3	41.8
そうした職種の情報が不足している**	72.1	89.7	81.5
医師以外の人が多く心細い	26.5	39.7	33.6
企業などの大きなレベルで仕事ができる	45.6	43.6	44.5
臨床をしないから楽である	13.2	12.8	13.0

2群の差：\*P<0.05, \*\*P<0.01

表8 対象者の保健所医師・医系技官，産業医に対するイメージ量

(単位：%)

職種	産業医志向	n	イメージ量 <sup>a</sup>	
			多い	少ない
保健所医師・医系技官	あり	68	16.2	83.8
	なし	78	5.1	94.9
	全体	146	10.3	89.7
産業医**	あり	68	39.7	60.3
	なし	78	16.7	83.3
	全体	146	27.4	72.6

<sup>a</sup>：“多い”は、「非常にたくさん」、「ある程度」、「少ない」は、「少しだけ」、「ほとんどない」の各回答を合併して累計

2群の差：\*\*P<0.01

表9 対象者の産業医業務に対する認識（複数回答）

(各質問に「まったくそうである」、「そうである」と回答した割合)

(単位：%)

質問項目	産業医志向		全体 (n=146)
	あり (n=68)	なし (n=78)	
産業医は臨床医の受け皿の職種である	8.8	5.1	6.8
産業医の業務に必要な知識の教授が充分におこなわれていない	44.1	59.0	52.1
労働者の健康を守ることはやりがいがある	70.6	60.3	65.1
会社の体制が整っているならやってみたい**	61.8	16.7	37.7
必要な知識の修得ができるならやってみたい**	47.1	19.2	32.2
臨床の専門分野修得後ならやってみたい**	33.8	9.0	20.5
臨床と並行してならやってみたい**	47.1	20.5	32.9

2群の差：\*\*P<0.01

て最も高率であった回答は「労働者の健康を守ることはやりがいがある」(65.1%)であり，以下，「産業医の業務に必要な知識の教授が充分におこなわれていない」(52.1%)，「会社の体制が整っているならやってみたい」(37.7%)，「臨床と並行してならやってみたい」(32.9%)，「必要な知識の修得ができるならやってみたい」(32.2%)の順であった。

## 考 察

A 大学医学部医学科では，2年次の1月下旬または3年次の4月上旬に2週間実施される産業保健を含むチュートリアルコースの中で，産業医活動に関する講義が，現場のビデオ映像供覧を含めて3時間行われている。これに加え，職場のメンタルヘルス，職業性疾患と作業関連疾患およびトータルヘルスプロモーションプランの講義が各1時間，チュートリアルとして2事例(1時間または2時間)実施されている。したがって3年次および4年次の医学生は，5年次，6年次の医学生に比べ，コースの記憶が薄れていないと推測されるため，今回，調査対象に設定した。

今回の調査で，卒後の希望進路として，第1志望に保健所医師・医系技官，産業医，保険医をあげた医学生は女子1名(0.7%)にすぎず，ほとんどの学生が臨床医を

志望していた。この結果は，垂水ら<sup>1)</sup>の1993年，1994年の5年次医学生を対象とした結果と同様であった。しかし，産業医志向のある学生は46.6%に達しており，医学生の中で産業医への関心は低くないと考えられる。ただし，このうち産業医を進路選択の一つとして「考えている，または考えたことがある」医学生は7.5%にすぎず，垂水らの調査結果(24.2%)<sup>1)</sup>より低率であった。産業医志向には，垂水らの調査結果<sup>1)</sup>と異なり性別の有意差はなく，現浪別の有意差もなかった。学年別には，理由はよくわからないが，女子においてのみ4年生(75.0%)が3年生(33.3%)より有意に高率であった。以下の考察では，これらの点について考慮する必要がある。

産業医の養成を図ることを目的として設置された産業医科大学を「受験した」または「考えたが受験しなかった」医学生の割合は，産業医志向あり群がなし群より高率であった。したがって，産業医志向のある者は，入学前から産業医への関心が高い者が多いと考えられる。

産業医志向に関連する要因を検討した。その結果，産業医志向と周囲に産業医がいることとの関連はみられなかった。

医学科志望の動機も，前述の垂水らの結果<sup>1)</sup>と同様に，産業医志向の有無と関連していなかった。最も高率であった医学科志望の動機は，垂水らの結果<sup>1)</sup>と同様に，「人

を救える」(52.1%)であった。また垂水らの調査<sup>1)</sup>と比較して、「人との触合い」(15.1%),「生命等への興味」(23.3%),「自己裁量が大」(7.5%),「厳粛な職業」(1.4%)および「長く続けられる」(15.8%)と回答した割合が低かった。

医学生が進路選択に際して考慮する要件では、垂水らの調査結果<sup>1)</sup>と異なり、産業医志向の有無と関連していなかった。垂水ら<sup>1)</sup>は、医師過剰の不安を感じる医学生が57.3%で過半数を超え、特に産業医志向あり群では、医師過剰への不安が進路選択と関連していることは否定できないとしている。しかし、本調査の医学生では、逆に勤務医不足によって医学科における2008年度以降に地域枠が導入<sup>3)</sup>されるなど、この問題の進路選択への影響はほとんどないと考えられる。進路選択に際して考慮する要件で最も高率であった回答は、垂水らの報告(「能力・個性を活かしたい」(65.3%))<sup>1)</sup>と異なり、「社会に役立ちたい」(47.3%)であった。また「経済的な豊かさ」(40.4%)および「人のために尽くす」(30.1%)と回答した割合が、垂水らの調査結果(それぞれ23.9%, 6.0%)<sup>1)</sup>より、高くなっていた。この結果には、昨今の経済不況や医学科における地域枠導入が関与していると考えられる。

本調査の医学生の保健所医師・医系技官、産業医に対する認識の程度は、垂水らの結果<sup>1)</sup>と同様に、現在のこれら職種への進路状況から推察されるほどには低くなかった。「臨床医に比較して社会的評価が低い」(23.3%),「研究対象となるテーマが少ない」(24.7%),「医師としてアイデンティティーがない」(24.7%)などの消極的な回答は少なかった。特に「臨床医に比較して社会的評価が低い」および「研究対象となるテーマが少ない」との回答は、垂水らの調査結果(それぞれ44.8%, 43.5%)<sup>1)</sup>より、低率であった。これらの他に、「臨床医に比べて給与水準が低い」(25.3%)および「企業などの大きなレベルで仕事ができる」(44.5%)と回答した割合も、垂水らの調査結果(それぞれ52.2%, 72.3%)<sup>1)</sup>より、低くなっていた。また、興味深いことには、産業医志向あり群は、なし群より「保健所医師等の職種に関心がある」と回答した割合は、垂水らの結果<sup>1)</sup>と同様に有意に高率であり、さらに「患者に接する機会が少なくもの足りない」および「そうした職種の情報が不足している」と回答した割合は有意に低率であり、否定的な回答が少なかった。一方、最も高率な回答は、垂水らの結果(88.3%)<sup>1)</sup>と同様に「そうした職種の情報が不足している」(81.5%)であった。したがって自己学習や特に産業医に関しては卒後の資格取得のための研修への参加が期待される。

残念なことに、保健所医師・医系技官、産業医に対するイメージ量が「多い」と回答した医学生の割合は、垂水らの結果(それぞれ18.2%, 23.4%)<sup>1)</sup>と同様に、それぞれ10.3%, 27.4%にすぎず、特に保健所医師・医系技官が低率であった。しかし、産業医に対するイメージ量に関

しては、垂水らの結果<sup>1)</sup>とは異なり、産業医志向あり群(39.7%)が、なし群(16.7%)より有意に高率であった。したがって、医学生の産業医に対するイメージをさらに高めるためには、産業医科大学にならって産業医への動機づけ教育<sup>3)</sup>も行うことが肝要であるが、実施するには時間的のみならず人的な裏付けが必要と考えられる。

医学生の産業医業務に対する認識では、最も低率であった回答は「産業医は臨床医の受け皿的職種」(6.8%)であり、逆に最も高率であった回答は「労働者の健康を守ることはやりがいがある」(65.1%)であった。これらの結果は、垂水らの結果(それぞれ24.5%, 83.4%)<sup>1)</sup>と同様であったが、いずれも割合が低下していた。「産業医の業務に必要な知識の教授が充分におこなわれていない」と回答した割合(52.1%)も、垂水らの調査結果(79.1%)<sup>1)</sup>より低くなっており、産業保健を含むチュートリアルコースによって情報不足はかなり改善されたと考えられる。産業医に就く場合の条件では、垂水らの結果<sup>1)</sup>と同様に、産業医志向あり群はなし群で傾向の違いがみられた。すなわち産業志向あり群では61.8%が会社の受け入れ体制、産業医志向なし群では20.5%が臨床と平行業務を上げていた。ただし、これらの割合は、いずれも垂水らの調査結果(それぞれ95.5%, 53.8%)<sup>1)</sup>より低くなっていた。垂水らの結果<sup>1)</sup>と同様に、産業医志向あり群はなし群より、「会社の体制が整っているならやってみたい」、「必要な知識の修得ができるならやってみたい」、「臨床の専門分野修得後ならやってみたい」および「臨床と並行してならやってみたい」と回答した割合が有意に高率であった。

以上の結果から、医学生の産業医についての関心や卒後の進路としての可能性、産業医を進路とする際に考慮する点は、過去の報告とは大筋では似ていることがわかった。しかし、医学生の産業医志向の現状を明らかにするために、他大学でも同様の調査が実施されることが期待される。

謝辞：本研究は、岐阜大学医学部医学科学生富岡奨幸氏、鳥居翼氏、仁藤裕美氏、二宮央氏との共同研究である。記して謝意を表す。またデータの整理を手伝ってくれた奥村まゆみ氏に感謝する。

## 文 献

- 1) 垂水公男, 杉田篤生, 萩原明人, 森本兼囊：医学部学生の産業医志向について。産衛誌 37：199—206, 1995。
- 2) 大久保利晃：わが国産業医制度の現状と改善の方策。産業医学ジャーナル 12：269—282, 1990。
- 3) 松本政俊, 井上和男, 竹内啓祐：エビデンスに基づく地域医療教育文献レビューと政策への適用。医療と社会 22：103—112, 2012。
- 4) 大林雅之, 伊藤幸郎：産業医への動機づけ教育の効果判定—イメージ・アンケートと自己評価の試み—。産業医科大学雑誌 13：149—154, 1991。

別刷請求先 〒501-1194 岐阜市柳戸 1-1  
岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野  
井奈波良一

**Reprint request:**  
Ryoichi Inaba  
Department of Occupational Health, Gifu University Graduate  
School of Medicine, 1-1, Yanagido, Gifu, 501-1194, Japan

## Questionnaire Survey on the Inclinations of Medical Students Towards Becoming Occupational Physicians

Ryoichi Inaba

Department of Occupational Health, Gifu University Graduate School of Medicine

This study was designed to evaluate the inclinations of medical students towards becoming occupational physicians. A self-administered questionnaire survey on the awareness of the activities of occupational physicians and their willing to do post graduate courses in this field was performed among second and third grade 146 medical students in one university in 2012. The subjects were divided into two groups (Group A, subjects who have considered or may consider in future becoming occupational physicians; Group B, subjects who do not consider it for all time).

The results obtained were as follows:

1. Only one female of the 146 subjects (0.7%) expressed the desire to become an occupational physician after graduation, however 46.6% of those belonged to Group A.
2. There were no relations between the inclination of medical students towards becoming occupational physicians and the existence of the occupational physician around them, or their desired motive to a university school of medicine.
3. There were extremely few negative answers concerning the activities of occupational physicians.
4. Responses were varied concerning conditions in the practice of occupational physicians. Those with inclinations towards becoming occupational physicians were mostly concerned with the establishment of a system for the acceptance of occupational physicians in industry, while those without inclinations toward it considered practicing as occupational physicians as a sideline to regular clinic duties.

These results seemed to be similar to the results from the past report.

(JJOMT, 61: 193—198, 2013)